熊本県ＩＰＭ実践指標【スイカ】

時期	管理項目	管理ポイント
育苗ハウスの準備	ハウス内および周辺の雑草対策	病害虫の発生源となる雑草の除去，地表面にマルチ資材を敷設する等，耕種的方法で雑草の発生を防ぐ。
	害虫の侵入防止対策	施設内への害虫，特に，ウイルス病を媒介するタバココナジラミ，ミナミキイロアザミウマ，アブラムシ類の侵入を防止するために以下の対策を行う。 1)天井に近紫外線除去フィルムを展張する。 2)ハウス開口部を防虫ネット（目合い0.4mm推奨）で隙間がないよう被覆する。 3)ハウス開口部の内側に黄色粘着テープを設置する。 4)入り口はビニルや防虫ネットを使用した2重構造として，野外から直接害虫が侵入しないようにする。
	資材・器具の搬入	育苗に使用する資材や管理器具は，次項の密閉処理前に搬入する。
	ハウス内発生害虫の除去	上記管理項目をすべて終了した後，1週間程度植物のない状態を作り（密閉処理推奨），ハウス内に発生している害虫類を死滅させる。
育苗期間	害虫の発生調査	黄色粘着板と青色粘着板を設置し，微小害虫の早期発見と発生範囲の把握に努める。
	育苗作業	播種，ポットへの土入れなど育苗作業は全て育苗ハウス内で行う。培土は無病または消毒済みのものを使用する。
		刃物や接ぎ木クリップ等，直接植物に触れる器具は，消毒または洗浄したものを使用する。
		育苗作業と本ぽ内管理を一連に行う場合は，育苗作業を先に行う。本ぽから移動する場合は，着衣や履物の交換などにより病害虫を持ち込まないよう努める。
	資材の搬入	育苗期間に資材を搬入する場合は，害虫が付着していないことを確認する。
	植物の持込み禁止	育苗ハウス内にスイカ苗以外の植物を持ち込まない。
	粒剤施用	定植2～3日前にタバココナジラミに効果のある粒剤を株元処理する。
本ぽ準備	栽培ほ場周辺での雑草管理	雑草を発生源とする害虫の飛び込みを抑制するため、周辺の雑草防除に努める。
	土壌病害虫対策	前作までに発生した土壌病害虫に応じて適切な土壌消毒（太陽熱、熱水、蒸気、土壌還元、土壌くん蒸等）を実施する。
	ハウス内での雑草管理	ハウス内は隙間なく耕起し，雑草をすき込む。全面マルチとし地面の露出を最小限とするよう努める。
	害虫の侵入防止対策	下記の害虫侵入防止対策を行った後に定植する。 1)ハウス開口部を防虫ネット（目合い1.0mm以下（サイド0.4mm，谷下換気部1.0mm以下推奨）で被覆する。隙間がないよう破損個所は修復しておく。 2)ハウス開口部の内側に黄色粘着テープを設置する。 3)入り口はビニルや防虫ネットを使用した2重構造として，野外から直接害虫が侵入しないようにする。 4)ハウス周辺に光反射資材を敷設する。
	畝たて	散布作業に十分な通路を確保する。
	高温対策	循環扇を設置して温度上昇を防ぐ。
定植時	苗の選別	罹病葉や食害痕のない健全な苗を選別して定植する。
	苗の運搬	運搬時の害虫寄生を防ぐため，定植苗は，目合い0.4mmの防虫ネットを被覆して育苗ハウスから本ぽに運搬する。
	定植間隔	過繁茂とならないよう，適正な植栽間隔となるよう努める。
	植え替え作の農薬散布	2作が重なる植え替え栽培では，2作目定植直前に1作目に対して治療効果のある殺菌剤及び殺成虫効果の高い殺虫剤散布を行うことで，2作目の農薬使用回数を低減するよう努める。
定植後～収穫時期	防除要否の判断	黄色や青色粘着板を利用して害虫の発生状況を把握するよう努める。
		ほ場の観察により病害虫の早期発見に努める。
		ほ場内の発生の有無，量と気象予報などを考慮して防除の要否を判断する。
	病害対策	ハウス内が加湿にならないよう換気に努める。
		畝内に入る管理作業は，茎葉が濡れている時間帯を極力控える。
		手袋やハサミ等の管理器具は清潔なものを使用する。
		病害が発生した果実やウイルス病被害株は早期に除去し，密封や土中に埋設するなどして処分する。
	虫害対策	天敵や訪花昆虫に影響が少ない方法，薬剤を選択する。
		チョウ目害虫の防除には生物農薬（BT剤）を使用する。
		チョウ目害虫の幼虫を見つけた場合は捕殺する。
		アブラムシ類，ホコリダニ類の防除には気門封鎖剤を使用する。
		マルチをしていない部分に発生した雑草は除去するよう努める。
		ハウスを移動する際は，服に付着している害虫を次のハウスへの持ち込みを防ぐため，着衣の交換，手やブロアー等による払い落としを行う。
		天敵温存用以外の植物の持ち込みや，栽培は行わない。
	農薬の使用全般	十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。
		散布むらが発生しないよう，通風・採光の良い仕立てとなるよう努める。
		複数の病害虫が発生している場合は，各農薬の登録病害虫等を考慮し，同時防除効果により使用薬剤数（農薬成分数）を削減するように努める。
		薬剤は地域の防除暦や指導資料を参考に効果が見込まれるものを選択する。
		RACコードを参考に，同一系統の薬剤を連用しないよう努める。
		初めての組合せで混用する場合は，一部に試し掛けして薬害が発生しないことを確認してから全体に使用する。
		微生物農薬は単剤施用を基本とし，有効成分に影響のある他の農薬と混用しない。
収穫後	病害対策	次作の発生源となる被害残さは，ハウス密閉処理後に除去するか，速やかにすき込んで土壌消毒前の分解を促す。
	虫害対策	次作への持ち越し，周辺への分散を防止するために収穫終了後は密閉処理する。なお，悪天候等で作物の枯死に時間がかかると予想される場合には，古株枯死に使用できる薬剤の併用も検討する。
全般	病害虫発生予察情報の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入手し，適時適切な防除方法に努める。
	作業日誌	各農作業の実施日，病害虫・雑草の発生状況，使用した農薬や資材の名称，使用時期，使用量，散布方法等のＩＰＭに係わる栽培管理状況を作業日誌として記録する。
	研修会等への参加	県や農業協同組合が開催するＩＰＭ研修会等に参加する。